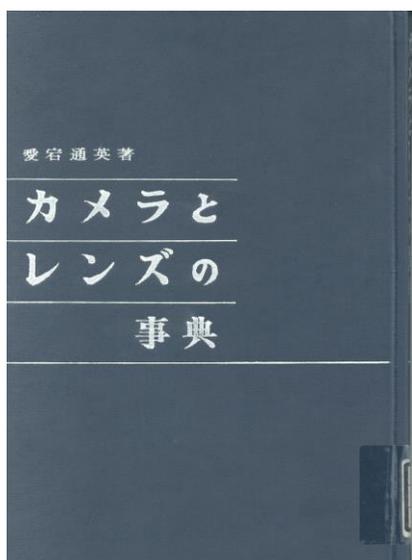


日本カメラ博物館 JCI ライブラリー
学芸員 宮崎真二

おたぎみちふさ
愛宕通英 (1900-1974) は、1924年に東京帝国大学工学部造兵学科を卒業後、陸軍航空本部技術部にて爆撃弾道の研究や航空機搭載用光学兵器である爆撃照準具の研究、審査を行い、後に技師となります。1933年には東京光学機械（現：トプコン）へ移籍して光学兵器の設計、製造およびアマチュア向け小型カメラの開発にあたり、1943年には設計部長に就任しました。



『カメラとレンズの事典』

戦後も取締役、嘱託として同社にかかわりながら、1952年にはカメラの部分組立工場「銀友光機研究所」を設立し経営にあたりました。またその一方で、カメラ研究・評論・著述活動を開始します。1950～60年代のカメラ雑誌各誌上では、技術、メカニズムに関する解説記事の寄稿や質問回答を行っている様子が見られます。

1961年には日本カメラ社から『カメラとレンズの事典』を発行しました。本書はカメラメカニズムについて「カメラ技術者になる一歩手前程度まで」（まえがき）の内容を、カメラの基本要素にはじまり、カメラの種類、レンズの作用、シャッター、ボディーのメカニズム、主なアクセサリと、できるだけ部分別に単純化した項目を設けて解説しています。再版分では掲載機種のアップデートに加えて巻末に約30頁分の追補記事を設け、発行後に誕生したメカニズムなどについて補足を行っています。本書は版を重ねて1980年代中頃まで刊行され、内容の充実した参考書として親しまれました。



『写真工業』1972年1月号

1969年にはJCIの「日本の歴史的カメラ」事業開始にあたり審査委員に就任し、歴史的カメラの選定に対して熱心に取り組みました。『カメラ毎日』1970年8月号の特集「日本カメラ発達史」に収録された「模倣から創造へ 歴史的カメラ審査委員八人の新証言」では、審査委員による座談会抄録が掲載され、愛宕は自分がカメラの開発、製造に携わった戦中、戦後のエピソードについて発言しています。また、歴史的カメラに関連したものとして、『写真工業』に「国産カメラ発達史」を1972年1月号から1974年5月号まで全28回連載しました。初回は「黎明期の情勢とカメラメーカー」として、量産工業として成立する以前の国産カメラについて概説し、以降は歴史的カメラ選定機種を中心に、試作機なども交えながら年代別に1970年までの機種解説を行うなど、著述によるカメラの普及啓蒙活動に生涯を捧げました。